

A Study on the Usage of K0-series Discourse Demonstratives of the Influence Element

陳, 海濤

九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学コース

<https://doi.org/10.15017/1905548>

出版情報：芸術工学研究. 26/27, pp.1-14, 2018-01-22. Faculty of Design, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



コ系文脈指示詞の使用法における影響要素に関する研究

A Study on the Usage of KO-series Discourse Demonstratives of the Influence Element

陳海涛¹

CHEN Haitao

Abstract

In recent studies, the usage of *ko*-series discourse demonstratives is described as “direct knowledge” (Kuroda1979), “It is specific for the speaker” (Horiguti1978). However in their theories, it is difficult to explain some example sentences. Previous studies have paid much attention on the usage of *ko*-series discourse demonstratives, but the answer is still unclear. The usage of discourse demonstratives is decided by the speaker. The speaker processes the language by mental monitor structure. Language is closely related to the human mental monitor structure. Kinsui(1999:67)said that “I shall argue that the core notion of *ko*, and *a* are deictic, in the sense that the expressions with these demonstrative prefixes make direct reference to an entity whose existence is recognized by the speaker prior to the discourse session in question, while that of *so* is not”. The basic meaning of the exophoric use is “close to the speaker”. In this paper, cognitive research methods are employed to argue the usage of *ko*-series discourse demonstratives and the speaker’s recognition of the notion “nearly”. In addition, it points out some problems in current researches. The basic method for the usage of *ko*-series discourse demonstratives is based on the knowledge that is required in the context .

0. はじめに

近年の先行研究では、コ系文脈指示詞¹⁾の使用には、「話し手だけがその指示対象をよく知っている(久野1973)」「直接的知識(黒田1979)」「話し手にとって指定的である(堤2012)」などの説がある。しかし、それらの説では解釈できない例文がある。

指示詞の使い分けに関する決め手はあくまでも、話し手²⁾である。話し手が、必要な情報を心的に処理し、言語化して表出する。言葉は人間の心的なメカニズムと密接に関わっている。

金水(1999:67)では、「ア系列およびコ系列では直示・非直示用法にわたってこの直示の本質が認められるのに対し、ソ系列はそうではないことを示す」と指摘している。また、金水(1999:71)は、「ア系列およびコ系列の非直示用法³⁾がともに直示用法の拡張である」と指摘している。

コ系現場指示の基本的な意味は「話し手にとって近い」というところに求められる。そして、コ系現場指示用法「話し手にとって近い」という判断基準は文脈指示用法において、どういうふうに応用されているか、すなわち、文脈指示用法において、どの要素が話し手にとって「近い」と認識されているのかということを知りたい。つまり、現場指示のメタファーとしての用法を見極める必要がある。また、指示詞の使用の裏に隠されている認知のメカニズムを明らかにしたい。

結論を先取りして言えば、コ系文脈指示詞の使用には、文脈レベルで要求されている知識を持っていることが一番基本的な使い方であると考えられる。

連絡先：陳海涛, chenhaitaodairendaigaku@gmail.com

¹九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学コース

Communication Design Science Course, Department of Design, Graduate School of Design, Kyushu University

1. 先行研究

本節では、これまでの主な先行研究を概観する。

1.1. 阪田 (1971)

阪田 (1971) では、文脈指示詞は会話と文章という下位分類をしている。

「会話」では、話し手の発言内容は自分の領域内としてコ系で、相手の発言内容は自分の領域外としてソ系で指示する。

「文章」では、先行の叙述内容を主体的に捉えた場合は自分の領域内としてコ系で、客観的に捉えた場合は領域外としてソ系で指示する。

問題点：阪田 (1971) では、「対話」に関する解釈では、うまく説明できない例文がある。相手の発言内容であっても、コ系指示詞で指示することもできる⁴⁾。また、「文章」の場合、ただ話し手の主観により指示詞の使い分けをするのではなく、場面により相手(第三者)の領域も考慮しなければならない例文もある(本稿での例 20)。

本稿では、「文章」や「対話」における、指示詞の使用上には、差があることを認めるが、指示詞の使い分けの本質は「文章」や「対話」という文の形式の区別ではなく、話し手が指示対象を心内領域でどのように認識しているか、または、話し手がどのような要素を参照して指示詞の使い分けをしているかということであると考える。

1.2. 久野 (1973)

以下、コ系の指示詞の使用について、久野の見解を紹介する。

コ系列：その事物が目前にあるかのように生き生きと叙述する時に用いられるようで、依然として眼前指示代名詞的色彩が強いようである。話し手だけがその指示対象をよく知っている場合にしか用いられない。

久野 (1973 : 69)

久野は、話し手・聞き手が「よく知っているかどうか」ということを判断基準として、指示詞の使い分けを分析する。確かに、指示詞の研究に対して、大きな貢献とは言える。しかしながら、久野の解釈では、うまく説明できない例が、後に黒田 (1979) によって反例として提出されている⁵⁾。

1.3. 黒田 (1979)

黒田は久野 (1973) の提示した「知っている/知らない」という説に対する反例を示し、「概念的知識/直接的知識」という概念を用いてその反例を解釈することを試みた。

黒田は指示詞の選択について以下のような基準があると考えている。

ア系(及びコ系) : 直接的知識の対象として指向する。

ソ系 : 対象を概念的知識の対象として指向する。

黒田 (1979 : 102)

黒田は指示詞の使い分けの基準は話し手にとって概念的知識であるか、または直接的知識であるかによって決まると考えている。

問題点：黒田 (1979 : 102) では、コ系指示詞の選択について「直接的知識の対象として指向する」という基準を提出している(それに対して、庵 (2007) も反例を提出している本稿での例 26)。しかし、「直接的知識の対象として指向する」ということの判断基準は何か。指示対象に対する知識の追及は無限溯源になると考えられる。どこまでの知識を持っていれば、「直接的知識」と言えるのか。それについては、反例がある(本稿での例 14)。

1.4. 田窪・金水 (1996b)

指示詞における先行研究の中で、もっとも重要なのは、金水・田窪に提示された談話管理理論というものである。これは、黒田が提示した「概念的知識」、「直接的知識」という概念に基づいて、発展させた「複数の心の領域」を設定したものである。また、聞き手の知識という概念を排除し、「聞き手の知識を想定しないモデル」を提示している。具体的な内容は本論で紹介する。

また、本稿と関連するほかの先行研究は、必要に応じて各節で紹介する。

2. コ系文脈指示詞の用法に関する考察

まず、時間や空間を指示する際、コ系指示詞の使用法を究明する。

2.1. 時間・空間

2.1.1. 現在

(1)曾根二郎は、この時だけ静かに言った。

井上靖「あした来る人」

この例文では、コ系指示詞を使用し、話し手(曾根)が発話する時、すなわち、現在を指示している。

2.1.2. 未来

(2)この連休には旅行を予定しています。

金水・木村・田窪(1989:84)(下線は筆者)

2.1.3. 過去

(3)この三月、大学を卒業しました。

金水・木村・田窪(1989:84)(下線は筆者)

金水・木村・田窪(1989:84)によると、「この」と「春、五月、水曜日、連休、…」などの時期の名前を組み合わせ、現在から最も近いその時期を表すことができる(過去でも未来でもよい)」と指摘している。

よって、例(2)では、現在から近い連休を指している。例(3)では、現在から近い過去を指している。

2.1.4. 現在地

(4)だって、君の言って来た条件ではこんなところしかないよ。知っている学生がここに居るんだ。

井上靖「あした来る人」

この例文は、小説の中の会話である。「ここ」は話し手が現在いる場所、すなわち、現在地を指示する。

2.2. コ系文脈指示詞の基本的な用法(聞き手の存在を考慮しない場合)

2.2.1. 現場指示の平行用法

金水・田窪(1990:139)では、「文脈指示のコは現場指示の一種である」と指摘している。

現場指示の場合、話者はまず、現場に存在している指示対象を視覚などで認識し、それを映像として頭に導入する。さらにそれを言語ルールに基づき、言語化して表出す

る。話し手は指差しなどを利用し、現場にある指示対象を同定し、相手の注意を喚起する。

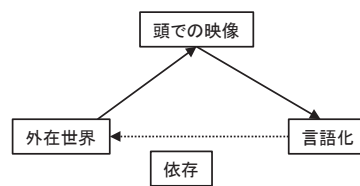


図1 現場指示

目の前の状況の描写であっても、頭に存在している状況の描写であっても、それらを言語化して表出するルートは現場指示と類似するところがある。それは両方とも頭に存在している映像を言語化して表出すというところである。一種映像のように読者に映し出している。その場合、指示詞の使用は描写している映像の中での時間や空間と関わっている。よって、現場指示の一種と考えられる。以上の説明は下記の図で表記する。

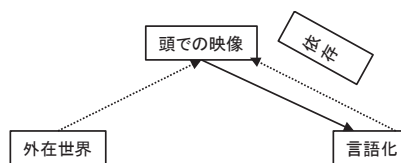


図2 文脈指示(文章の場合)

(5)さすがに身体は疲れている。リュックサックの重みが、ずっしりと肩に重いこんでいる。どこを見ても人間が多い。こんなに多くの人間が一体ここで毎日何をしているのか。

夏目漱石「こころ」

(6)そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆なの前に立っているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

夏目漱石「こころ」

この二つの例文では、作者は第一人称「私」で語っている。話し手は目の前の状況を描写している。それは映像のように、読者の目に映る。そのため、一種の現場指示と見なされる。例(5)の話し手(私)は現在いる場所を描写しているので、「ここ」を使用し、自分が現在いる場所を指示する。例(6)では、指示対象(西洋人)が「前に立っている」ので、コ系指示詞を使用する。話し手は指示対象「西洋人」

と距離的に近いということを読者に示している。

(7)曾根は朝食をすますと、リュックサックから、ワイシャツ、靴下、ハンカチ、はだ着類などを取り出して、それを風呂敷に包んで部屋のすみの小さい机の上に置いた。それから手回り品のこまごましたものをも取り出し、これも机の上にきちんと並べた。こうしたところは、見かけによらずきれい好きである。

井上 靖「あした来る人」

この例文では、曾根が自分の荷物を片付けている状況を描写している。描写している内容が映像のように反映している。描いている対象はソ系指示詞で指示している対象もあるし、コ系指示詞で指示している対象もある。それは視点の移動であると思われる。

この例文では、時間の推移が、指示詞の使い分けに影響する。まず、曾根は「リュックサックから、ワイシャツ、靴下、ハンカチ、はだ着類などを取り出し」て、それから「部屋のすみの小さい机の上に置き」て、また、「手回り品のこまごましたものをも取り出し」て、「これも机の上にきちんと並べた」という順番である。

この例文では、コ系を使用し、「手回り品のこまごましたもの」を指示する。ここでのコ系指示詞を使用したのは時間的にも空間的にも「手回り品のこまごましたものをも取り出し、これも机の上にきちんと並べた」時と場所を、動作が発生した時と場所に設定したためである。よって、それ以前のことはソ系を使用し、一見過去に発生したことのように感じられる。読者は話し手の指示詞の使用により、話し手の視点の移動を読者に示している。時間的に言うと、「それ」の指示対象は、コ系指示対象より、時間的に早めに出ている。この例文では、指示詞の使用は話し手の視点の移動により決まる。

時間(現在)や場所(現在地)を指示する際、「話し手にとって近い」と認識し、コ系指示詞を使用する。それは、時間や場所を指示する際、現場に依存性が高いからである。即ち、現場指示用法における心内構造をそのまま文脈指示用法に当てはまって応用されると考えられる。

コ系文脈指示詞の使用法は話し手が持つ指示対象に対する知識量と関わっている。コ系指示詞の用法を掘り出すため、幾つかの知識の状態を設定し、コ系指示詞の用法を究明したい。

よって、本節では、三つのレベルを設定し、分析を行う。

それぞれ、「話し手が指示対象についての知識を持っていない場合」、「話し手が指示対象についての文脈レベルで要求される知識を持っている場合」、「話し手が指示対象についての知識を最大に持っている場合」という三つの下位分類である。

2.2.2. 知識を持っていない場合-「ソ」

(8)実験をすれば、その/*この結果が得られる。

(9)もしあの時買った宝くじが当たっていたら、*この/その金を頭金にして家が買えたのになあ。

(堤 2012 による金水・田窪(1990 : 137)を修正)

(10)もし、私に子供がいたら、*この/その子にピアノを習わせよう。

堤(2012 : 129)

(11)どうして電子計算機はこれだけ広い範囲で利用され、しかもあらゆる人々から関心を持たれているのか。それ/*これは電子計算機の万能性のためである。

(坂井)

三上(1955:334-36)では、コ系指示詞は条件節中の仮定された事物を指すことができない、質問文の内容も指示できないと指摘している。上記の例文では、仮定された文や質問文の内容を指し示している時、コ系指示詞は使用できないのに対して、ソ系指示詞は使用できる。三上の説は上の例文をうまく説明できる。吉本(1992:115)では、三上の説に基づき、コ系文脈指示詞の指示対象は「実質的なければならない」と指摘している。しかしながら、三上の説に対しては反例がある。

(12)「こういう実験をしたらこういう結果になるかもしれないという予測は誰が考えついたの？」

<http://kyoiku.yomiuri.co.jp/torikumi/kagaku/content/s/post-192.php>

この例文では、指示対象(実験)が仮定された文にあっても、コ系指示詞の使用が可能なのはなぜか。それはコ系指示詞の使用法は指示対象が条件節や質問文にあるかどうかという文の構造から求めるべきではなく、話し手

は指示対象を心内領域でどういうふうに捉えているのか、即ち、話し手が指示詞を使用する際、持っている認知メカニズムに焦点があるからであると考えられる。

まず、上の例文でコ系指示詞が使用できない理由を説明する。(8)-(10)の例文は、下記のような説明ができる。

「実験」をまだやっていないので、どのような結果が出るかは発話時点では、まだ不明である。つまり、話し手は指示対象「結果」に対して、知識を持っていない。同じように、「宝くじ」はまだひいていない。「子供」はまだ産んでいない。よって、まだ、ひいていない「宝くじ」や産んでいない「子供」についての知識を話し手は持っていない。心理的に近いとは言えないので、ソ系指示詞を使用する。

例(12)では、「こういう」は前文で出てきた「実験」を指し示している。問題は指示対象「実験」が仮定された文にあるのに対して、コ系指示詞を使用するのはなぜかである。

まず、「実験」が前の「こういう」で修飾されているので、話し手が実験に対してある程度の知識を持っているということが推測できる。また、後文で「予測」ということから見ると、話し手はどのような実験をしたら、どのような結果が出るかということを全般的に把握していると考えられる。よって、この例文でコ系指示詞を使用できる要因は、話し手が指示対象に対して、知識を持っていることである。即ち、指示対象「結果」の内容について把握している。よって、話し手は心理的に指示対象に対して「近い」と認識し、コ系指示詞を使用しているのである。

話し手は指示対象が「近い」と認識できるレベルの知識を持っている際、「近い」と認められると考えられる。また、日本語のコ系指示詞の使用では、心理的に「近い」という認定には幅がある。その幅について、以下で詳しく論じる。日本語の近称コ系文脈指示詞と比べると、中国語の近称“这”系文脈指示詞の使用法のほうが、指示対象が話し手にとって心理的に「近い」と認識する要素の幅が大きい。

日本人は自分にとって、心理的に近いと認めることは必ずよく知っていることであると推測できる。同じ指摘を久野(1973:69)は、「話し手だけがその指示対象をよく知っている場合にしか用いられない」と指摘している。本稿では、久野(1973)の提言した「よく知っている」という言い方が曖昧で、具体的な判断基準が必要であると考えている一方、コ系指示詞の使用法には他にも要因があると考えている。それについては、後文で詳しく論じる。

- * コ系指示詞を使用できない要因は指示対象が仮定された文や質問文にあるという文の構造に求めるべきではなく、話し手が指示対象に対して、知識を持っているかどうかということである。
- * 話し手は指示対象に対して知識を持っていない場合、ソ系指示詞を使用する。

2.2.3. 文脈レベルで要求される知識を持っている場合

話し手は指示対象に対して、知識を持っている場合であっても、必ずコ系指示詞を使用するわけではない(条件付き)。よって、コ系指示詞の使用に対するほかの要因を抽出する必要があると考える。

(13)僕は昨日生協でぜんざいを食べたけど、その/このぜんざいはおいしかったよ。

堤(2012 : 121)

例(13)では、話し手(僕)が実際にぜんざいを食べたので、指示対象「ぜんざい」に対して、知識を持っていると推測できる。話し手は指示対象に対して、知識を持っているので、心理的に近いと認識し、近称指示詞を使用できる。「この」を使用する場合、指示対象「ぜんざい」が目の前にあるように生き生きとしているイメージがあり、指示対象と一体感が感じられ、心理的に近く感じられるので、より自分に引きつける効果がある。

「その」を使用する場合、冷静に指示対象「ぜんざい」を指示するという語感があり、主観関与ということを強調せずに、客観的に事実を述べている。

また、例(13)の例文を以下のように変えると、「この」の使用は不可能になる。

(14)僕は昨日生協でぜんざいを食べたけど、その/*このぜんざいの主産地を知りたいなあ。

(堤 2012 : 121 の例文の変形)

例(13)は例(14)と同じように、話し手が指示対象「ぜんざい」を食べたので、「ぜんざい」に対してある程度、もしくは、ある方面の知識を持っていると判断できる。

黒田(1979:98)によると、「ア系(及びコ系)の指示詞に対応する直接的な知識ということは、直接体験に基づく知識ということであろう」と指摘している。黒田の説明に従うと、話し手が「ぜんざい」を食べて直接に体験した

ので、話し手にとって直接的な知識であると判断できる。よって、コ系指示詞を使用すべきである。しかし、例(14)ではコ系指示詞の使用は不可能である。よって、コ系指示詞の使用法は話し手が指示対象に対して直接的な知識を持っているかどうかということから求めるべきではなく、他の要因を追求しないとイケないと考えられる。

例(13)と例(14)はいずれも、話し手は指示対象「ぜんざい」に対して、知識を持っている。例(13)では、コ系指示詞が使用できる一方、例(14)では、コ系指示詞は使用できない。それはなぜか。つまり、コ系指示詞の使用法は話し手が指示対象について知識を持っているということだけでは不十分で、「条件付き」ということを究明する必要がある。

例(13)において、話し手は「おいしい」かどうかは知っているの、コ系指示詞を使用できる。つまり、話し手は「ぜんざい」の後ろの文「おいしかったよ」というレベルの知識を持っている。しかし、例(14)において、「ぜんざいの主産地」という方面の知識を持っていない。即ち、文脈レベルで要求されている知識を持っていないので、コ系指示詞を使用できない。

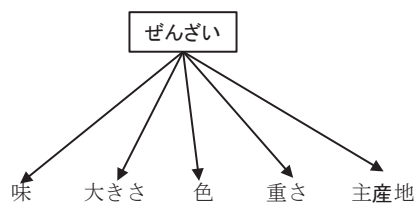


図3 ぜんざいの性質

「ぜんざい」には、いくつかのレベルの知識がある。例えば、ぜんざいの「味」、「大きさ」、「色」、「重さ」や「主産地」などである。例(13)では、話し手は「ぜんざい」を食べたので、「味」、「大きさ」、「色」、「重さ」に対して、知識を持っていると推測できる。そして、「このぜんざいはおいしかったよ」というレベルのことは言える。即ち、「ぜんざい」が「おいしい」かどうかというレベルの知識は持っている。しかし、話し手は「ぜんざい」を食べても、「ぜんざい」の主産地を知らないの、「このぜんざいの主産地を知りたいなあ」とは言えない。コ系指示詞の使用法は話し手が指示対象に対して文脈レベルで要求されている知識を持つことを要求している。また、他の制限がない場合、コ系とソ系は両方共使用できる。また、話し手(私)は今日ではなく、「昨日食べた」ので、ソ系指示詞を使用し、淡々と過去のことを述べているという語感

がある。

また、書かれた文章の場合、作者は読み手を対象として、情報を伝達している。その場合、聞き手という要素が直接に介入せずに、指示詞の使い分けをしている。

下記で紹介する例文は上での例文と異なり、小説の一文である。小説の場合、物語の展開に必要な内容を導入する。つまり、話し手は頭に格納している情報を言語化して表出する。そして、頭に格納した情報は話し手にとって「直接経験情報」なのか、または、「間接情報」なのかは判断できない例文もある。そのため、金水・田窪(1996b)が示している指示詞の使い分けに対する基準は、書かれた文章の場合には効かないと思われる。

金水・田窪(1996b)では、指示詞の使い分けを下記のように述べている。

D-領域 (長期記憶とリンクされる): ア系

: 長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される。

: 直示的指示が可能

I-領域 (一時的作業領域とリンクされる): ソ系

: まだ検証されていない情報 (推論、伝聞などで間接的に得られた情報、仮定などで仮想的に設定される情報) とリンクされる。

: 記述などにより間接的指示される。

金水・田窪(1996b:263)

(15) 上京に、平林という人がいた。この人のところへ、田舎から手紙をたのまれた男がいたが、この男はひらばやしという名を忘れて、人に読ませると「たいらりん」と読んだ。

(興津要「落語の歴史」)

李(2012:74)は、上の例文について、「話し手が指示対象に対して情報的に優位に関わっており、話し手の情報提供者としての立場の優位がここに反映されていると考えられる」と指摘している。

問題は特に物語において、話し手が指示対象に対して情報的に優位に関わっているのにもかかわらず、ソ系指示詞も使用できることをどういふふうに解釈すればいいかである。実は上の例文では、コ系指示詞の代わりに、ソ系指示詞も使用できる。

- (15) * 上京に、平林という人がいた。この/その人のところへ、田舎から手紙をたのまれた男がいたが、この/その男はひらばやしという名を忘れて、人に読ませると「たいらりん」と読んだ。

また、下記の例文にも、コ・ソ系、両方の指示詞が使用できる。

- (16) 昔むかし、あるところにおじさんが住んでいました。その/このおじさんは、山へ柴刈りに行きました。

話し手は指示対象に対して、「情報的に優先に関わって」いても、コ・ソ系両方とも使用できる。よって、話し手が指示対象に対して「情報的に優先に関わる」ということはコ系指示詞の使用法の決め手ではないと思われる。

以上の二つの例文は小説（落語）や物語（昔話）から取られた文である。話し手は文章や物語を書く時、指示対象に対してある程度の知識を持っていると推測できる。指示対象に知識を持っていないと、物語の展開や指示対象に対する描写はできない。本論では、コ系指示詞を使用する際は、指示対象に焦点を当て、話し手のところに引き寄せるので、一種の心理的親密性が生まれる。ソ系指示詞を使用する際は、客観的に物事を描くと解釈する。

- * 小説の場合、コ系指示詞の使用法は直接知識と間接知識とに関係なく、話し手が指示対象に対して詳しい知識を持っていれば、コ系・ソ系指示詞の両方とも使用できる。ただし、文学上の効果に差がある。

2.2.4. 知識を最大持っている場合

次に指示対象が固有名詞の場合、指示詞の使用法がどうなるかを分析する。

- (17) こないだ2のコンサートに行ったよ。*その/このバンドは、やっぱり人気があるね。会場は超満員だったよ。

堤(2012 : 38)

堤(1998:48)では、「先行詞が固有名詞の場合には「この」が使用され、「その」は使用できない」と指摘してい

る。本論では、その記述が正しいと認めた上で、その理由を究明したい。

この例文では、話し手は指示詞「この」を使用し、「2(コンサートの名前)」という固有名詞を指示している。話し手は指示対象に対して、ある程度の知識を持っていると推測できる。固有名詞は唯一性を持っているので、特定しやすいという特性を持たせる。また、上林(2000:44)では、「記述説と言われる一派の主張は固有名は非常に豊富な意味内容を持っているというものだった」と指摘している。よって、話し手は固有名詞を指示する際、話し手が指示対象について、豊富な知識を持っていることを暗示している。知識量から言うと、「豊富な知識」は「文脈レベルで要求される知識」より多い。よって、本論では指示対象が固有名詞の場合、話し手は指示対象についての知識を最大に持っているとして議論を進める。知識量を判断できる範囲で、指示対象が固有名詞の場合、話し手が指示対象についての知識量を最大に持っているとする。コ系指示詞の使用は知識量と関わっている。従って、指示対象が固有名詞の場合、コ系指示詞の使用が示唆される。しかし、指示対象が固有名詞の場合、話し手が指示対象についての知識量を最大に持っているかという点必ずしもそうではないこともある(後文で論じる)。

- (18) 今日 はダイアナ元王妃が亡くなったという話を聞いたんですが、一体この/その人はどのようなひとですか？

(堤 2012 : 117 の例文の変形)

堤(1998:48)では、「先行詞が固有名詞の場合には「この」が使用され、「その」は使用できない」と指摘している。しかし、この例文では、指示対象が固有名詞であっても、ソ系指示詞の使用ができるのはなぜか。

例(18)では、話し手が指示対象「ダイアナ」という固有名詞の前に「という」を使用していないので、話し手は指示対象に対して、知識を持っていると推測できる。堤(2012)の説によると、「指示対象は固有名詞の場合、コ系指示詞の使用が義務的である」と指摘している。しかし、この例文では、指示対象が固有名詞であっても、ソ系指示詞の使用ができるのはなぜか。

「一体この/その人はどのようなひとですか」という文から見ると、話し手は指示対象「ダイアナ」の人柄という方面の知識を持っていないと判断できる。よって、文脈レベルで要求されている知識を持っていないのである。こ

の例文では、話し手は指示対象についての知識を最大に持っているのではなく、指示対象に対する「豊富な知識」から「文脈レベルで要求される知識」を引いたレベルの知識しか持っていない。知識量が減ったので、ソ系指示詞も使用できる。

上の説は下記の図で表記する。話し手の指示対象に対する知識量を黒い影で表記する。

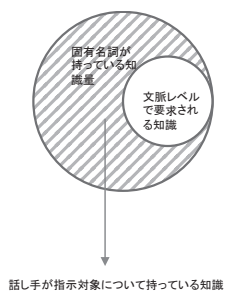


図4 話し手が持っている知識量

しかし、同じ状況で、指示対象が普通名詞の場合はコ系指示詞の使用は不可能である(例14)。その理由を後文で説明する。

2.3. コ系文脈指示詞の基本的な用法(聞き手の存在を考慮する場合)

2.3.1. 話し手が発話場面に介入する場合

指示対象が第三者の領域に属する場合、第三者の領域を吸収する場合と吸収しない場合がある。それは話し手が発話場面に介入するかどうかにより決まると考えられる。

(19)「やあ失敬」先生はこう/そういってまた歩き出した。

夏目漱石「こころ」
(下線および「そう」⁹⁾は筆者による)

この例文は、私小説の中の文で、作者は第一人称(私)で、語っている。登場人物(先生)が言ったことは第三者の領域に属するので、ソ系指示詞を使用するのが一般的であろう。上の例文では、第三者が言ったことをコ系指示詞で指示するのはなぜか。

話し手(私)は「こう」を使って、第三者(先生)の発言内容「やあ失敬」を指示している。話し手(私)は第三者(先生)の発言内容を叙述し、ある情報として、読者に伝達している。つまり、発言する前に、話し手は第三者(先生)の言っ

たことをすでに自分の記憶の中に収めていることが推測できる。それを表出する際、記憶データベースに格納した情報を活性化し、言語化して表出する。つまり、話し手(私)は第三者(先生)の領域を吸収して共有領域を形成し、指示対象が自分の領域に属するように一種の説明文のように情報を伝達する。よって、コ系指示詞が使用できる。

また、小説の場合、全て第三者の領域を吸収できるわけではない。例えば、下記の例を見てみよう。

(20)先生はまたばかりと手足の運動をやめて仰向けになったまま浪なみの上に寝た。私も*この/その真似をした。

夏目漱石「こころ」
(下線および「この」は筆者による)

この例文は私小説の中での文である。作者は第一人称(私)になって、物語を展開する。話し手(私)は指示詞「その」を使用し、先生の水泳姿勢「またばかりと手足の運動をやめて仰向けになったまま浪なみの上に寝た」ということを指示している。指示対象は第三者(先生)の領域に属しているので、コ系指示詞の使用は不可能で、ソ系指示詞を使用する。

例(19)と例(20)は両方とも、話し手(私)は指示詞を使用し、第三者(先生)の領域に属することを指示している。しかし、それぞれはコ系指示詞とソ系指示詞を使用しているのはなぜか。それは例(19)では、話し手(私)は第三者(先生)の領域を吸収して共有領域を形成することができる一方、例(20)では、話し手(私)は第三者(先生)の領域を吸収することはできないからである。

例(19)では、話し手は第三者の発言に関する描写なので、指示対象がどちらの領域に属するかは明示する必要がない。つまり、話し手が第三者(先生)の領域を区別する必要はない。第三者(先生)に対する描写なので、指示詞の使用要素において、話し手は発話場面に直接に介入していないからである。よって、話し手(私)は第三者(先生)の領域を吸収し、共有領域を形成することができる。言い換えれば、話し手(私)の領域と第三者(先生)の領域を融合して、共有領域を形成している。また、コ系指示詞の使用は、一種現場指示のようである。話し手(私)が第三者(先生)の行動を描写し、現実性を強調している。

例(20)では、話し手(私)は「その」を使用し、「真似」を修飾し、すなわち、自分が他人のことを真似していることを暗示しているので、第三者(先生)の領域を吸収する

ことはできない。指示詞の使用法において、話し手が発話場面に介入しているため、指示対象が第三者の領域に属することを明示しないといけない。言い換えれば、話し手(私)の領域と第三者(先生)の領域は対立して、指示対象が第三者(先生)の領域に属するので、ソ系指示詞が使用される。

2.3.2. 聞き手が知識を持っていない場合

指示対象が固有名詞の場合、すべてコ系指示詞を使用するわけではない。

(21)ダイアナ元王妃が亡くなりました。この/＊その
王妃は世界平和にとっても貢献したのを知っていますか？

堤(2012 : 117)

堤(2012 : 117)上記の例文に関して、下記のように述べている。

ソノの使用が完全に容認できないわけではなく、???という判断をする話者が存在する点である。これは恐らく(32a)⁷⁾の後文の内容と関係しているように思われる。(32a)の後文は「～知っていますか？」と、あたかも聞き手がダイアナ元王妃を知らない可能性を話者が想定しているような文になっている。

本稿は、堤の説に賛意を表す。そして、コ系指示詞を使用するルールとは一体何かという問題を追求する。指示対象が固有名詞の場合、どのような場面で、コ系指示詞を使用できるのか、または、どのような場面でソ系指示詞を使用できるのかを究明したい。

よって、「ダイアナ」という固有名詞の前に「という」を使っていないということから、聞き手は、指示対象(ダイアナ)に対して知識を持っていると話し手は思っているということが推測できる。また、「王妃は世界平和にとっても貢献したのを知っていますか」という文から、聞き手が「王妃は世界平和にとっても貢献した」というレベルの知識を持っていない可能性があるという話し手は想定している。

従って、上記の例文では、指示対象は固有名詞であるが、話し手は聞き手に対する配慮(聞き手が指示対象(ダイア

ナ元王妃)に対して知識を持っているかどうか)という要素を加えた場合、ソ系を全く使えないのではなく、使用の容認度は増える。本論の説に従えば、聞き手が指示対象に対する知識量は指示詞の使用に対する一種の束縛変量で、コ系指示詞の優先地位を揺れさせ、ソ系指示詞の使用容認度が高くなると考えられる。詳しい内容は後文で論じる。

(22) ぼくは大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君もその先生につく気はありませんか。

金水・田窪(1990)によると、命令、質問などの発話行為は聞き手の知識を考慮しなければ成り立たないということを提言しているが、詳しい理由は述べられていない。

この例文では、指示詞ソ系は前文で出てきた「山田」という人を指示している。指示対象「山田」は話し手が導入した内容で、話し手は聞き手より指示対象についての知識をより多く持っている。この二つの有力な要因はコ系指示詞の使用は推測できるが、しかし実際にはソ系指示詞を使用している。それは、この二つの要因より、ほかの強力な要因が働くからであると考えられる。

話し手は「山田という先生」に習ったので、指示対象「山田」に対してある程度の知識を持っていると推測できる。田窪(1989)では、「という」は固有名詞を不定名詞化する働きがある。よって、「山田」という固有名詞の前に「という」を使っているということから、聞き手にとって、未知の知識であると話し手は思っているということが推測できる。

この例文は質問文である。聞き手に対して、質問するので、聞き手の指示対象に対する知識量も考慮しなければならない。よって、話し手は指示対象との親密な関係を強調するより、聞き手へ質問することを優先しなければならない。つまり、この例文では、話し手が指示対象に対して知識を豊富に持つことより、聞き手への配慮(聞き手が指示対象について知識を持っていないこと)が指示詞の使用において重要な要因になっている。

例(22)において、聞き手が指示対象に対して知識を持っていないと話し手は想定している一方、例(21)において、聞き手が指示対象に対してある程度の知識を持っていると話し手は想定している。例(21)と例(22)はいずれも、話し手は指示対象に対して知識を持っている。よって、話し手が指示対象に対して知識を持ち、聞き手が指示対

象に対して知識を持っていないと話し手は想定している場合、ソ系指示詞を使用すると考えられる。

例(21)において、聞き手が指示対象に対してある程度の知識を持っていると話し手は想定している。よって、ソ系指示詞の使用容認度が低い。ソ系指示詞を使用すると、かえって、話し手は聞き手が指示対象に対して知識を持っていないと想定し、聞き手のメンツを潰す。例(22)において、聞き手が指示対象に対して知識を持っていないと話し手は想定しているため、ソ系指示詞を使用している。

2.4. コ系文脈指示詞の使用法における特性

2.4.1. 指定できる場合

(23)太郎は羊を飼っていて、それを育てて売ること
で生計を立てている。花子は*この/その羊にえ
さをやる。

堤(2012 : 127)

堤(2012 : 127)によると、「コノが使用できないことは、コノがこのような非特定の状況を表現するのには適さないものであるということを示している」と指摘している。堤(2012)によると、コ系文脈指示詞の使用法は「話し手にとって指示的」とであると指摘している。本論では、堤の説には補助条件が必要であると考えている。話し手は指示対象を言及した時、特に説明文の場合、詳しい知識を持っているので、全ての指示対象は「話し手にとって指定的」と判断できる。しかし、そういう場合はソ系も使用できる例文が多数存在する。よって、堤の説には経験の問題があると考えられる。

上の例文では、太郎は複数の羊を飼ってそれを売ること
で生活している。つまり、指示対象の「羊」が特定の羊
ではなく、しょっちゅう動的に変化する羊の集団の中
での羊である。

つまり、ソ系指示詞は文脈で提供している「太郎は羊を
飼っていて、それを育てて売る」という種類の羊を指示
している。花子は羊にえさをやるので、えさをやられた羊は
花子にとって指定的であると推測できる。なぜかという
と、それは、花子がえさをやるという動作自体、羊を見なが
ら、えさをやるので、羊が花子にとって指定的である可
能性があるからである。ではなぜこの例文では、コ系指示
詞の使用は不可能であるか。それは文脈で提供している情

報からは、「太郎が羊を飼っていて、育てて売る」以外の
情報はないため、花子にとって羊は不特定のであるため
である。

話し手は指示対象を指定できないので、心理的に疎遠
感を感じる。よって、近称コ系指示詞を使用できないので
ある。

2.4.2. 主題性

(24)先日行った実験は、その/*この結果が学会で評
価された。

(25)先日、実験を行った。その/この結果が、おもしろ
いことがわかった。

金水(1999 : 67)によると、「コ系列の非直示用法は
「談話主題指示」、すなわち先行文脈の内容を中心的に代
表する要素または概念を指し示すものとする」と指摘
している。

上の例文では、庵(1995a)では、以下のように解釈してい
る。単一文で充足する代行指示の「その」は「この」
に置き換えられないが、非単一文ではそれが可能になる。
しかし、その理由には触れていない。本稿では、文として
の話題性または主体性が関係あると考える。

先日行った実験は、その/*この結果が学会で評価さ
れた。→中心部「実験」

→先日行った実験の結果が学会で評価された

先日、実験を行った。→中心部「実験」

その/この結果、おもしろいことがわかった。→中心
部「結果」

「先日行った実験は、その/*この結果が学会で評価さ
れた」という文では、主語は「実験」で、発話の主題とな
っている。「その/*この結果が学会で評価された」とい
う文は文法的にいうと、主格補語となっている。「先日行
った実験の結果が学会で評価された」という文と統語的
には異なっているが、意味は同じである。「実験」と「結
果」は従属関係であると考えられる。コ系指示詞を使用
する場合、話し手は指示対象を引き寄せるという効果
がある。例(24)、「結果」の前に、「この」を使用すると、前
の文の主題「実験」の主導権(主題性)を奪うので、「この」
の使用は不可能である。しかし、二文から成る例(25)の場
合では、それぞれの文にそれぞれの主題があるので、「こ

の」の使用は可能であると考えられる。

員だったよ。

2.4.3. 一貫性

他の影響要素では、聞き手に対する配慮など以外、指示対象に対する情報提供の一貫性にもコ系指示詞の使用に影響する。下記の例を見てみよう。

(26)順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その/??この順子が今は他の男の子供を2人も産んでいる。

庵(2007:98)

例(26)では、指示対象「順子」は「『あなたなしでは生きられない』と言っていた」順子である。つまり、話し手は「『あなたなしでは生きられない』と言っていた」という順子を文脈で提供している。

「あなたなしでは生きられない」と言っていたから「いま、その男と幸せな生活を過ごしている」と推測できる。

しかし、後ろの文から見ると、「順子が今は他の男の子供を2人も産んでいる」ということになっている。つまり、「他の男の子供を2人も産んでいる」順子と、前文で提出した情報「あなたなしでは生きられない」と言った順子とは矛盾するので、情報の提供に対して、一貫性を欠くことになる。故に、この例文では、「この」の使用は不適切である。即ち、「この」の使用は前文で提出した情報と後文が一致することが必要であると考えられる。話し手は文脈で描いている固有名詞の性質が変わった場合、コ系指示詞の使用は不可能である。そういう場合には、話し手は心理的に遠いと認識するので、ソ系指示詞が使用されている。

3. 考察

上記の例文では、指示対象が固有名詞の場合と普通名詞の場合では、指示詞の使用法が異なっているので、下記で上掲した例文をもう一度引用し、分析を行う。対比するため、三つの組に分けて分析する。

一：

(13)僕は昨日生協でぜんざいを食べたけど、その/このぜんざいおいしかったよ。

(17)こないだ2のコンサートに行ったよ。*その/このバンドは、やっぱり人気があるね。会場は超満

上記の二つの例文は、両方とも、話し手は指示対象に対して、文脈レベルで要求される知識を持っている。しかし、例(13)では、ソ系指示詞を使用できる一方、例(17)はソ系指示詞を使用できない。例(13)と例(17)の区別は指示対象が固有名詞か、あるいは、普通名詞かということである。

二：

(14)僕は昨日生協でぜんざいを食べたけど、その/このぜんざいの主産地を知りたいなあ。

(18)今日はダイアナ元王妃が亡くなったという話を聞いたんですが、一体この/その人はどのようなひとですか？

この二つの例文では、両方とも、話し手が指示対象に対して、文脈レベルで要求される知識を持っていないが、例(14)ではコ系指示詞が使用できない一方、例(18)では、コ系指示詞が使用できる。一組と同じように、ここでの例文の唯一の区別は指示対象が固有名詞かどうかということである。

三：

(21)ダイアナ元王妃が亡くなりました。この/その王妃は世界平和にとっても貢献したのを知っていますか？

(22)ぼくは大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君もその先生につく気はありませんか。

この二つの例文では、例(21)はソ系指示詞の使用容認度が低い一方、例(22)では、ソ系指示詞が使用できる。この二つの例文において、例(21)の指示対象は固有名詞で、例(22)の指示対象は「固有名詞+という」(固有名詞を不定化にすること)である。

上記で述べている三つ組の例文を分析すると、指示対象が固有名詞の場合、コ系指示詞の使用容認度が高くなる。それはなぜか。上林(2000:44)では、「記述説と言われる一派の主張は固有名は非常に豊富意味内容を持っているというものだった」と指摘している。固有名詞は「非常に豊富意味内容を持っている」ということから、広い意味の内容を持っているということが推測できる。つまり、本稿での説に従うと、多数のレベルの意味合いを持っていて、普通名詞より包括的な意味合いを持っていること

が推測できよう。

三組の例文の対比に従うと、コ系指示詞の使用法は一つの影響要素によって決まるのではなく、複数の要素によって決まると考えられる。

一組における分析を下記の表1で表記する。

	類似点	指示対象	知識量	指示詞
(13)	文脈レベル で要求される知識あり	普通名詞	少	コ/ソ
(17)		固有名詞	多	コ

表1

表1では、指示詞が固有名詞の場合、知識量が豊富ということを暗示している。例(17)において、話し手は指示対象に対する知識量の貯蔵が「非常に豊富に持っている」ので、コ系指示詞の使用を示唆し、ソ系指示詞は使用できない。二組における分析を下記の表2で表記する。

	類似点	指示対象	知識量	指示詞
(14)	文脈レベル で要求される知識なし	普通名詞	少	ソ
(18)		固有名詞	多	コ/ソ

表2

表2では、話し手は指示対象に対して文脈レベルで要求される知識を持っていない場合、コ系指示詞の使用は不可能であることが示される。つまり、「文脈レベルで要求される知識」を持つのはコ系指示詞の使用の最小限の要求であると考えられる。また、話し手は指示対象に対して、「文脈レベルで要求される知識」を持たなくても、指示対象が固有名詞の場合、「豊富な意味内容を持っている」ことを暗示しているため、ある程度の知識量を保証するので、コ系指示詞が使用できると考えられる。

三組における分析は下記の表3で表記する。

	類似点	指示対象	知識量	指示詞
(21)	聞き手への配慮	固有名詞	多	コ/*ソ
(22)		固有名詞が不定名詞化する	少	ソ

表3

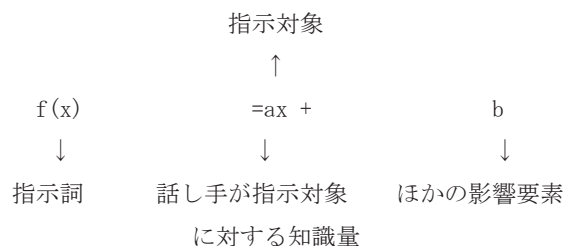
例(21)においては、聞き手が指示対象に対して知識を持っていると話し手は想定しているため、コ系指示詞を

使用し、ソ系指示詞の使用容認度が低い。

例(22)においては、固有名詞の後に「という」をつけているので、固有名詞が不定名詞化されるため、知識量が少なくなっている。固有名詞が不定名詞化される要因は聞き手が指示対象に対して知識を持っていないと話し手は想定している。よって、ソ系指示詞を使用している。

これらの結果より、コ系文脈指示詞の使用法は指示対象に対する直接的知識を持っているかどうかということではなく、話し手が指示対象に対して文脈レベルで要求している知識を持っているというのが要因であると言える。上限は固有名詞が持っているレベルの知識量で、下限は文脈レベルで要求されている知識であると考えられる。

指示詞と指示対象の関係は一種の関数と考えることができる。指示詞における影響要素を変域として、指示詞を値域として考えてみよう。



以下はコ系指示詞の使用法に対するまとめである。

ある程度の知識を持っている場合は K_1 で表記する。文脈レベルで要求されている知識を持っている場合は K_2 で表記する⁸⁾。固有名詞の場合、知識量が豊富なため、 K_{Max} で表記する。以上の説明は、表4はで表記する。

$f(x)$	a	b
コ	K_{Max} あり	0
コ/ソ	K_{Max} あり, K_2 なし	0
コ/ソ	K_2 あり	0
ソ	K_2 あり	聞き手への配慮
ソ	K_1/K_2 なし	0
ソ	K_{Max} あり	一致性を欠く
ソ	K_1 あり	指定できない

表4

ここでいう「聞き手への配慮」は「聞き手が指示対象に対して知識を持っていない場合」と「聞き手の領域に属する場合」ということである。

表4を以上の説に利用し、もう一度説明する。

知識量が多い場合,*の数で表記する(比較の為,以下の段階を設定している)。

- ① 固有名詞の場合(K_{Max}) * * * * *(仮定)
- ② 文脈レベルで要求される知識(K_2) * * *(仮定)
- ③ 指示対象に対する知識があり,文脈レベルで要求する知識を持たない*(仮定)

上の三つの段階をまとめると表5なる。

	知識量	影響要素
コ	* * * * *	K_{Max}
コ/ソ	* * * * *以下	$K_{Max} + K$ なし
コ/ソ	* * *	K_2 あり
ソ	* * *	K_2 あり + 聞き手への配慮
ソ	*	K_1 があり, K_2 なし
ソ	0	K_1 なし

表 5

4. 結論

以上の分析に従って,本稿では,以下の結論を導いた。

①コ系指示詞の根本的な使用法は話し手が指示対象に対する知識量と関わっている。すなわち,文脈レベルで要求される以上の知識量を持つ場合,コ系指示詞を使用する。

②聞き手への配慮も指示詞の使用法に影響する。それは効く場合もある(文脈レベルで要求される知識を持つ場合)が,効かない場合もある(指示対象が固有名詞の場合)。

③話し手は指示対象に対して,知識を持たない,指定できない,情報の提供の一致性が欠く場合,「近い」として認められないので,ソ系指示詞を使用する。

④コ系文脈指示詞は時間や場所を指示する際,現場に対する依存性が高い。

引用文献:

久野暉,「コ・ソ・ア『日本文法研究』より」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,1973,(69-73)。

金水敏・田窪行則・木村英樹,『日本語文法セルフ・マスターシリーズ4 指示詞』,くろしお出版,1989。

田窪行則・金水敏,「複数の心的領域による談話管理」,『認知言語学の発展』,坂原茂(編),ひつじ書房,1996b。

堤良一,「文脈指示における「その/この」の言い換えについて」,『日本語・日本文化研究』8,大阪外国語大学1998。

金水敏「日本語の指示詞における直示 用法と非直示用法の関係について」『自然言語処. 理』6 (4),言語処理学会,1999,(67-91)。

上林洋子,「固有名の意味論」,『文学部紀要』14(1),2000,(44-53)。

注

- 1) 指示詞に関する分類はいろいろある。例えば,三上(1970)「直接指示・文脈承前」,久野(1973)「眼前指示・文脈指示」,黒田(1979)「独立的用法・照応的用法」,金水(1999)「直示・非直示」,田窪(2010)「眼前指示・非眼前指示」などが挙げられる。一般的に使われるのは「現場指示・文脈指示」であろう。これらの用語は言い方が違うが,それらの意味する範囲を一緒と認めれば,差し支えない。ア系現場以外の使用は,特別で「ア系記憶指示」と名付けられる場合もある。本稿ではあえて,「現場指示・文脈指示」という従来の分類に従って,分析を行う。
- 2) 本稿では,会話の順序において,発話する人は話し手,発話に応じて答える人は聞き手という決め方ではない。筆者が指示詞を使用する理由を究明したいので,指示詞を使う人を敢えて話し手と定義する。文の場合では,指示詞を使用して,発話する人は話し手と定義する。
- 3) 大きくいうと,金水が用いる「直示」を本論での現場指示として考えられ,「非直示」を文脈指示として考えられる。
- 4) A:……以上で,ファッション・シティ・プロジェクトの概要の説明を終わります。
B:このプロジェクトは,いつから開始するのかね。
金水(1999:78)
相手Aは「プロジェクト」ということを談話に導入したので,指示対象「プロジェクト」がAの領域に属している。この例文では,「この」を使用し,相手の発話内容を指示する。
- 5) 今日神田で火事があったよ。あの火事のことだから人が何人も死んだと思うよ。
黒田(1979:101)
黒田(1979:101)は,話し手が「あの火事のことだから」という言外の意味,つまり,「神田の火事」という概念だけからでは知り得ない話し手の直接的知識に基づいて,話し手が「人が死んだだろう」と推定していると説明している。
- 6) 本稿では,指示詞の使用容認度は全て日本語母語話者に依頼し,アンケートしてもらった。
- 7) 堤の論文の中での順番。
- 8) 話し手はある程度の知識を持っている場合,文脈レベルで要求される知識を持っているわけではない。文脈レベルで要求される知識を持っている場合,必ずある程度の知識を持っている。つまり,知識量から言えば, $K_1 < K_2$ 。

参考文献：

- 1) 三上章,「コソアド抄—『文法小論集』より一部」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,(1970),(35-37).
- 2) 服部四郎,「コレ・ソレ・アレとthis, that」—『英語基礎語彙研究』より,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,1968.
- 3) 阪田雪子,「指示語『コ・ソ・ア』の機能について」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,1971,(54-68).
- 4) 久野暉,「コ・ソ・ア—『日本文法研究』より」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,1973,(69-73).
- 5) 堀口和吉,「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8,(大阪外国語大学),1978b,(23-44).
- 6) 木村英樹・森山卓郎,「聞き手情報配慮と文末形式—日中両語を対照して—」,『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』,くろしお出版,1992,(3-43).
- 7) 黒田成幸,「(コ)・ソ・アについて」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,1979.
- 8) 金水敏・田窪行則・木村英樹,『日本語文法セルフ・マスターシリーズ4 指示詞』,くろしお出版,1989.
- 9) 金水敏・田窪行則,「談話管理理論からみた日本語の指示詞」,『認知科学の発展vol. 3』,講談社,1990.
- 10) 吉本啓,「日本語の指示詞コソアの体系」,『日本語研究資料集【第一期第七巻】指示詞』,ひつじ書房,1992,(105-123).
- 11) 田窪行則・金水敏,「対話と共有知識—談話管理理論の立場から—」,『言語』1月号,大修館,1996a,(30-39).
- 12) 田窪行則・金水敏,「複数の心的領域による談話管理」,『認知言語学の発展』,坂原茂(編),ひつじ書房,1996b.
- 13) 堤良一,「文脈指示における「その/この」の言い換えについて」,『日本語・日本文化研究』8,大阪外国語大学1998.
- 14) 定延利之・熊谷吉治・ 菊田修司,「「用語解説」旧情報と新情報」,『文法と音声II』,音声文法研究会編,1999.
- 15) 金水敏「日本語の指示詞における直示 用法と非直示用法の関係について」『自然言語処. 理』6(4),言語処理学会,1999(67-91).
- 16) 上林洋子,「固有名の意味論」,『文学部紀要』14(1),2000,(44-53).
- 17) 東郷雄二,「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」,『京都大学総合人間学部紀要』7(京都大学総合人間学部),2000,(27-46).
- 18) 迫田久美子,「指示詞コソアの正用と誤用」,『月刊言語』33-11,大修館書店,2004,(130-131).
- 19) 庵功雄,『日本語におけるテキストの結束性の研究』,くろしお,2007.
- 20) 劉 巖,「日本語と中国語の文脈指示詞の対立型と融合型 : 談話モデルによる分析をもとに」,『京都大学大学院人間・環境学研究科』第21号,2012.
- 21) 堤良一『現代日本語指示詞の総合的研究』,ココ出版,2012.